



代表者の受賞

春の叙勲・拝謁の記

2017年5月13日

和田義男

平成29年（2017）5月10日（水）春の叙勲で国土交通省から勲章を伝達されたのは300名ほど。夫婦同伴が殆どなので、東京プリンスホテル鳳凰の間は600人近くの参列者で埋まった。

午前11時過ぎから勲章伝達式が始まり、勲章の種類別に一人一人名前を呼ばれて立ち上がり、国土交通大臣（代理の政務官）から代表者に勲記と勲章が授与された。代表以外の受賞者は、伝達式後に職員から弁当などとともに手渡された。それでも7種類の勲章があるので、かなりの時間がかかった。

伝達式が終わると、その場で巻き寿司などの折り詰め弁当とお茶で昼食・休憩をとる。この間に、伝達式会場の演壇とホテルが用意した金屏風前の二箇所では記念写真を撮り合った。

午後1時過ぎから1号車から順に乗車し、皇居に向かう。600人もいるので、これも大変な作業。1台のバスに40人ほどが乗車して15台のバスが次々と出発。私が乗車した6号車も午後2時過ぎに皇居坂下門から入場し、一般参賀が行われる南北160mの皇居最大の長和殿の東側にある宮殿東庭に到着した。

トイレに行く以外はバスに乗ったまま小一時間の休憩後、午後3時ころバス単位に受賞者・配偶者別にそれぞれ6列横隊になり、バスの番号順に表玄関南車寄せから長和殿に入り、階段をあがって二階・春秋の間に入って整列。左向け左で南北約50人6列の長い列ができた。春秋の間の西側中央にお立ち台があり、そのまま、天皇陛下のお成りを待つ。私は、受賞者列の最後尾になったが、これはたまたま下車して整列した場所が6人の右端になったからそうっただけ。受賞者列の後ろに幅2～3mほどの間隔を空けて配偶者たちが6列横隊をつくったので、600人ほどが12列になって拝謁の榮譽を受けることになった。配偶者列の北側には車椅子の方々が陣取った。

午後3時半、御年83歳の天皇陛下が春秋の間・南口から入場されてお立ち台に上がられ、代表者の挨拶のあとお言葉を述べられ、拝謁が叶った。陛下は、お言葉の後、お立ち台からお降りになられると、南の方に進まれ、受賞者と配偶者の間を通過して反時計回りに参列者を一周され、北口から退出されたので、幸運にも私の目の前をお通りになられた。

陛下は所々で立ち止まられ、会釈されるので、その都度その場の参列者たちがお辞儀をする。配偶者と受賞者の間を通られるときは、配偶者の方に向かれたり受賞者の方に向かれたりしながら、労をねぎらうように丁寧にゆっくりと会釈されながら進まれた。

幸運にも陛下は私の目の前1mほどのところで止まられて会釈されたので、陛下のご尊顔を間近に拝することができた。車椅子の人には「どうですか」とお声をおかけになり、細やかなお心遣いが感じられた。

陛下が春秋の間北口から退出されると、1階南側の部屋でバス毎に記念撮影が始まった。カメラは二階にあり、上から見下ろすように巨大なシャンデリアを入れて撮影していた。受賞者は横一列の椅子に座り、配偶者は受賞者の後ろで左肩側の空間に立つ。受賞者は白手袋を右手に持って撮影する。手袋が必要なのは、記念撮影のときだけで、伝達式・拝謁共に手にすることも着用することもなかった。バスは、勲章の順番に受賞者・配偶者があいうえお順に配分されているので、最後の方は、本当に長い間待たされる。私は6番目の撮影だったが、それでもホテルに戻ったときには、午後5時頃で、駐車場に入ったバスの中で解散となった。

現在、国会で天皇陛下の退位法案が審議されているが、大変な激務であられることは間違いない。お疲れのご様子だと拝察していたが、幸いにもこの日はお元気そうであられたので安堵した。

長い一日だったが、終わってみればあっという間の出来事だった。

拝謁余談

天皇陛下のお成りを待つ間、長和殿春秋の間は静まり返っていたため、宮内庁のベテラン司会者が「皆様方が入場した車寄せの入口は国賓も同じように利用されますので、皆様は国賓級の待遇になります。」と冗談をいって笑いを誘った。また、「お帰りになるときに通られる東側の廊下は、一般参賀のときに天皇皇后両陛下がお立ちになるバルコニーがつくられますので、そこを通るときに手を振って頂ければ、皇族なみの待遇になります。」と更に突っ込んで来たので、大笑いになり、座が和んだ。

配偶者の列にモーニング姿の男性が一人いたので、場所が間違っているのではないかと気になったが、そうではなく、奥様が受賞され、旦那様が配偶者として参列していたのだった。なお、付き添いであっても配偶者以外の方は親族であっても拝謁が許されず、春秋の間の外で待機することになる。拝謁の栄誉は苦勞を共にしてきた夫婦にのみ与えられるということなのだろう。

かつては拝謁する服装には厳しいルールがあったが、現在は、だいぶ緩くなっているようで、上位の叙勲者以外は、黒の略服や背広姿も散見された。また、黒の短靴は紐付きではなく、飾りのあるものも見られたが、私は陛下に失礼だと感じた。しかし、それも許容範囲なのだという。ご婦人方は、大半が和服の正装だったが、中には洋服姿もあり、一人、黒いマントのような西洋風の日本女性もいて、時代は変わってきたなと感じた。

宮中の職員の中には、モーニング姿の他に日本では珍しいフロックコートの人も見られ、日頃見慣れない風景なので、さすが宮内庁だと思ったが、胴長短足の方のフロックコートは足が短く見えてかっこ悪く（失礼）、比較観察した結果、日本人はモーニングを選択する方が欠点を隠してくれるのでお勧めだということが分かった。ちなみに、日本では燕尾服と訳されるモーニングコートは、イギリスの名門進学校・イートンの制服が嚆矢で、現在でも使われている。高校の制服が礼服になるとは驚きだが、完璧なデザインだからこそ世界中で受け入れられているのだろう。〈 完 〉